バルザック『呪われた子』覚書（一）

――愛のテーマをめぐって――

西　節夫

はじめに

『呪われた子』(L'Enfant maudit) には、いずれも一八二七年あるいは二六年に書かれたと推定される、冒頭の数頁だけで放棄された三つの草稿が残されていて、そもそもの着想の古さを示しているが、実際には次のように二度に分けて執筆された。すなわち、一八三一年一月の「両世界評論」誌 (Revue des Deux Mondes) に、弟の死で跡継ぎを失った父親の懇望を容れて城館に戻る決心をしたエチエンヌ・デルーヴィルが、「ああ母上、お許し下さい!」とつぶやくところで終わる短篇が掲載され、それから五年後の一八三六年十月にいたって、今日の第二部に当たる続篇が、『砕かれた真珠』(La Perle brisée) と題して「クロニック・ド・パリ」紙 (Chronique de Paris) に発表されたのであって、翌年の「哲学的研究」(Études philosophiques) 叢書版に、『呪われた子』は初めて完全な形で収められている。

こうした成立期間の長さに加えて、殊に一八三一年から三六年というこの時期には、バルザックがその感情生活との密接なつながりのなかで、作家的にも思想家としても格段の進展と豊かな開花を遂げたこと――実際、『セラフィタ』(Séraphîta)、『ルイ・ランベール』(Louis Lambert) をはじめとして、「哲学的研究」に属する作品は殆どすべてこの間に完成したし、『砕かれた真珠』に数ヵ月先立って『谷間の百合』(Le Lys dans la vallée) も刊行されている――を反映して、『呪われた子』にはきわめてさまざまな要素とテーマとが含まれ、展開されている。『呪われた子』について、多様な作品解釈つまりは読み方がなされ、したがっ

てその評価も区々であるのはまさにそのためであろう。

一体、この作品の真の中心主題は何であるのか？『呪われた子』のどんな読み方が作者の最も本質的なメッセージを捉え得るのだろうか？ これらの問を念頭に置きながら、正面から扱われることの不当に少ない――と、筆者には思われるこの小説について、二回にわたって見てゆきたい。なお、『呪われた子』の第一部を中心にした今回の拙稿は、既発表の拙論[1]に若干の加筆と訂正を行なったものである。そのことをお断わりしておかねばならない。

一

一八二七年ないしは二六年に、バルザックは宗教戦争末期の低ノルマンディ地方を舞台にして、長篇の歴史小説『呪われた子』を書こうとした。この構想は、当時彼が抱いていた「絵画的なフランス史」(Histoire pittoresque de la France) 叢書の計画に関連していたに違いないが、かなりの長篇を目差していたと推測されるのは、残された三つの断片的草稿にいずれも「第一巻」と記されているからである。この時期きわめて自由主義的であった彼は、フランソワ・ジェルマンが仮説として述べているように、そこでおそらくヴィニーの『サン＝マール』(Cinq-Mars 一八二六年三月刊行) に対抗して、封建制批判の立場から、由緒ある家名や遺産を子々孫々に伝えねばならぬという、「相続の観念」(l'idée Hérédité または l'idée de dynastie) のもたらす悲劇を描く意図であったと思われる[2]。

相続の問題は、『呪われた子』の最も明白なテーマの一つであろう。粗暴で、残忍で、醜悪な容貌のゆえに人一倍嫉妬心と猜疑心の強いデルーヴィル伯爵（のちに公爵）は、結婚後七ヵ月で生まれた息子エチエンヌを若妻と初恋の相手との子供と信じて、直ちに殺そうとするが、悲嘆のあまり妻が死んでしまうのを恐れて思いとどまる。彼女は「彼の快楽のためと同じくらい、その目論見のためにも欠かせない存在」[3]だった。それは「地方的慣習法」によって、伯爵夫人の莫大な財産をデルーヴィル家が相続するためには、彼女とのあいだに男子の跡継ぎをもうける必要があったからで、デルーヴィル伯爵にとって、いや、およそバルザック的人間にとっていっそう本質的な情念である「吝嗇」が、同じ彼の嫉妬心を制したのである。生後十八ヵ月になったエチエンヌを、伯爵は城館に近い海辺の一劃に追放する。不義の子というだけでなく、その肉体的な虚弱さが封建領主たる彼の自尊心を傷つけ、憎悪を募らせたのだ。彼はやがて生まれた父親似のマクシミリヤンを偏愛し、跡継ぎに定め、エチエンヌについてはその存在すら忘れるにいたる。ところが、二十数年後、マクシミリヤンがコンチーニとともに討たれて、家名断絶の運命を目前にした老公爵は、エチエンヌの生存を知らされると、岩場に隠れたこの呪われた子に向かって、「まるで神そのものに対するようにひれ伏し、」[4]嫡出性への疑いを否定し、母子に対する過去の非道を詫びて、相続者として城に戻ってくれるように哀願するのである。

「両世界評論」誌に発表された『呪われた子』の粗筋だけを追えば、おおよそ右の通りであって、実際、一八三〇年末のバルザックは、すでに『エル・ヴェルドゥゴ』(El Verdugo) において、レガニェス侯爵家の存続と引き換えに長子ファニトに家族の死刑執行役を強いた、あの相続の観念の破壊的な力を描くために、こ

の短篇の筆をとったに違いない。しかし、相続の問題はもはや中心的なテーマではない。その観念の力はドラマチックな緊張を生み、第二部の最終場面にいたるまで筋の運びを決定してはいるが、それにとどまるのであって、『呪われた子』が過去の小説 roman du passé ではあっても、歴史小説と称し得ないことは明らかであろう。アンリ・ゴーチエの巧みな表現を借りれば、結局のところ「この〔相続の〕観念は、言葉の二重の意味でプレテクストにすぎない。すなわち、いっそう深い意義に満ちた別のテクストを生むために変えられてしまったプレ＝テクストであり、またドラマチックな契機（プレテクスト）」[5]なのである。筆をとって見て初めて真の主題を発見するのがむしろバルザックの常であって、『呪われた子』もまた例外ではなかったと見られる。

二

『呪われた子』に中心主題の変更をもたらしたものは何か？

海辺のエチエンヌは、母の愛に守られながら、学問と詩と、自然の観照と瞑想のうちに生き、遂には海と一体の境地にいたる。バルザックはすでに『アルデンヌの助任司祭 (Le Vicaire des Ardennes) と『最後の仙女』(La Dernière Fée ou la Nouvelle Lampe merveilleuse) において、ルソーの影響のもとにベルナルダン・ド・サン＝ピエールに倣って、ジョゼフとアベルという自然児をそれぞれ登場させていたが、エチエンヌにも彼らを思わせるところがあるとはいえ、この呪われた子は単なる自然児ではない。十六歳の彼は、早くもバルザックの哲学を体得した「詩人にして思索家」[6]である。

日増しに彼は、この世界のどんなものにも記されている神の言葉を解釈することに長じた。神秘の世界でひそかに、また執拗に行なわれるこうした探求は、彼の生活に、瞑想的な天才に見られる外見上の半睡状態を生じさせていた。エチエンヌは長い日中を砂地に寝そべったままですごしたが、心楽しく、知らずして詩人となっていた。(7)

姿かたちは子供で、精神的には大人である彼は、そのどちらの面でも同じように清らかだった。母の意思通り、学問に励むことによって、彼の感動は観念の領域に移されていた。そこで彼の人生の行為は、彼を苦しませるか、あるいは殺しかねない社会的世界からは遠くへだたった、精神の世界において成就されるのだった。彼は魂と知性によって生きた。読書を通して、人間的なもろもろの思考を把握したのち、彼は物質を動かす思考にまで上昇した。彼は大気のなかに思考を感じ、天上に記された思考を読んだ。(8)

すでにいくどか、彼は自分の感動と大海原の動きとのあいだに神秘的な交感のあることを認めた。その秘伝学が物質の思考を見通す力を彼に授けていたので、他のだれにもまして、この現象は彼に対して説得力があった。(9)

彼はいわば人間と植物とのあいだの、あるいはおそらく人間と神とのあいだの仲介者となった。(10)「……

…」魂が肉体を支配しているすべての人々と同じように、彼は鋭い視覚を持ち、非常に離れたところにある光のきわめて移ろいやすいニュアンスをも、水のきわめて束の間の震えをも、驚嘆すべきたやすさで、疲れも知らずに捉えることができた。[11]「……」遂に彼は、海のあらゆる動きのなかに天上の機構との密接なつながりのあることを察知するにいたり、一本の草から「……」さまよう星々にいたるまで、自然を調和のとれた総体のうちにかいま見た。天使のように清らかで、人間を堕落させる観念に汚されることもなく、子供のように素朴な彼は、さながら鷗のごとく、花のごとくに生きていたが、しかし、詩的な想像と、彼ひとりがその豊かな広がりを見つめていた崇高な学問との無尽蔵の力を、惜し気もなく用いるのだった。二つの宇宙のなんと驚くべき混合だろう！　あるときには、彼は祈りによって神にいたるまで上昇し、またあるときには、自己卑下と諦観のなかで、獣の穏やかな幸せにまで降りてくるのだった。[12]「……」神は彼に古代の隠者たちの力をあたえ、事物の精神に参入する完成された内的な感覚を賦与したように思われた。もろもろの稀有な精神的能力のおかげで、彼は他の人々以上に、不朽の御業（みわざ）の秘奥深く突き進むことができた。[13]

エチエンヌの極度の受動性と精神の不安定さ、その汎神論的形而上学の生理的ともいえる契機には、『田舎医者』（Le Médecin de campagne）の「墓掘りの娘」la Fosseuse を思わせるところがある。彼女もまた「月の満ち欠けや大気の変化によって、驚くほどの影響を受けた[14]」自然の子であった。しかし、いうまでもなくエチエンヌは単なる自然の一部分ではなく、自然の認識する一部分と化すのであって、「宇宙と同心の

鏡」に比せられる[15]魂の持主である『ル・ガ』(Le Gars) のヴィクトル・モリヨンや、大海原に対するエチエンヌとまったく同じように、「この生命(いのち)ある大地と完全に同化し、いわばその魂を捉え、その秘密に参入するまでにいたった[16]」『あら皮』(La Peau de chagrin) のラファエルとともに、彼は明らかにルイ・ランベールにいたる精神の系列に属している。「われわれの生活は、見たところ草木さながらに無為なものであったが、しかし、心と頭脳によってわれわれは存在していた[17]」と、ルイ・ランベールの友人も語ってはいないだろうか。

上記の『呪われた子』からの引用文は、いずれも第一部中に見出される。そこでモーリス・バルデーシュは、これらのくだりがエチエンヌのきわめてルイ・ランベール的な「病的に鋭い感性」と「若くして見者である天賦の才」とを示していることに注目しながら、「ルイ・ランベールを予示しているのか、それともものちの訂正によるのか?」ととまどっている[18]が、右の引用のうち、初めの三つのくだりはほぼ完全にあとから書き加えられたものであって、『ルイ・ランベール』の精神生理学と『セラフィタ』のイリュミニスムが顕著に反映しているとはいえ、最後の海との交感から天上への飛翔にいたる引用箇所は、逆に殆どが一八三一年の短篇の段階から存在している。それゆえ、一面において、フランソワ・ジェルマンが指摘しているように、「エチエンヌは一八三二年の哲学者ランベールと同じく、一八三五年の神秘家ランベールをも、したがってセラフィタをも予告している[19]」のである。ともあれ、短篇『呪われた子』を書き進めながら、バルザックはエチエンヌ・デルーヴィルという人物に次第に深い興味を抱いたに違いない。それから五年後に第二部に当たる続篇『砕かれた真珠』を執筆するが、それは、まさしく安士氏が推察している通り、「一八三二年

にルイ・ランベールという人物が形成されてから、同じ精神の型に属する人物としてこのエチエンヌが彼に仕上げを迫ったと考えられるからである。[20]」

バルデーシュによれば、『呪われた子』は『ルイ・ランベール』の「詩的で、いささか女性的な反映」であって、メロドラマや暗黒小説(ロマン・ノワール)的な要素が時にそれを損っているという。[21] アンリ・エヴァンスもまた、作者の意図は「社会の犠牲となる見者的人物を浮き彫りにすること」にあったと思われ、「その意味において、『呪われた子』は『ルイ・ランベール』の下書きであり、エチエンヌとルイとは同一人物である。だが、前者から後者へ、なんという進歩だろう！〔……〕エチエンヌはロマンチックな高揚の所産だが、ルイは深刻な偉大さの意識が生んだ人物である。エチエンヌは想像されたものだが、ルイは真実である」[22]と評価している。しかし、エチエンヌが「社会の犠牲となる見者的人物」であることはその通りだとしても、作者の最終的な深い関心が彼のそうした面を浮き彫りにすることにあったとはみなし難い。というのは、『呪われた子』には『ルイ・ランベール』とは比較にならない重要さで愛のテーマが存在しているからである。

三

エチエンヌをめぐる愛のテーマは、伯爵夫人ジャンヌ・デルーヴィルの母性愛から始まる。エチエンヌの毒殺と虚弱さを案じた医師ボーヴールワールの忠告に従って、ジャンヌは彼を胸から離さないばかりでなく、身辺の一切の世話を、独力で、献身的に見る。それはジャンヌにとって「限りない至福」[23]であり、やがて彼

女は同じ喜びを、エチエンヌの「魂の教育と精神の涵養が必要とする面倒見のなかに」見出すのである。[24] 作者はそこで次のような賛辞を記している。

伯爵夫人は、母性のなかに、愛する者への謙虚な崇拝の気持を育んでいる、そんな女性たちのひとりだった。「……」夫人はエチエンヌを牛耳ることにではなく、なにごとにおいても、彼を自分よりすぐれたものにすることに自尊心をかけたのである。おそらく彼女は、その尽きざる愛情によって自分が十分偉大であることを知っていたから、己れのどんな卑小化も恐れなかったのだ。支配を好むのは情愛を欠いた心の持主であって、本当の愛情というものは自己犠牲を、この真の力の美徳を大切にするのである。[25]

バルザックは、『柘榴屋敷』(La Grenadière) においてヴィレムサンス夫人の母性愛を描きながら、「神が子供たちを母の胸に置かれたのは、子供たちはそこに長くとどまるべきだということを母に悟らしめるためである」[26] と述べている。この言葉が端的に、また雄弁に示しているように、バルザックはルソーとも違って、授乳に始まる幼少年期の世話だけでなく、初期教育までも母親の責務とし、そのための献身と自己犠牲を母性の崇高な美徳と考えるのであって、ジャンヌ・デルーヴィルはこうした彼の見解に基づく理想的な母親像にほかならない。

ジャンヌの、彼女を理想的な母親たらしめている激しい母性愛の感情は、恋の情熱と分かち難い。彼女の美貌の従兄で、デルーヴィル伯爵によって相愛の仲を裂かれ、まもなく死にいたったジョルジュ・ド・シャ

ヴェルニーへの慕情と、それは深く結びついているからである。出産を前に、ジャンヌは失われた幸せを回想しながら、天使の訪れがマリアを聖なる母にしたように、別れのきわにシャヴェルニーの放ったまなざしが彼女を身籠もらせたのではないか、と思う。そして、この恋人のために呪われた子として生まれたエチエンヌを、彼女は「女たちが不義の子を愛するように」[27]愛するのである。とはいえ、ヴィレムサンス夫人の子供たちと違って、エチエンヌの嫡出性ははっきりしている。処女懐胎という、「純真無垢だった頃にふさわしい推測」は、「死よりもおぞましい婚姻の情景」によってたちまち打ち消され[28]、ジャンヌはそのことを確認させられるのである。確かに彼女は、エチエンヌの顔立ちにシャヴェルニーのそれが現われるのではないかと危惧するが、その根拠は「彼女があまりにも彼のことを思い暮らしてきた」[29]からであり、やがてエチエンヌのうちに「なんとなく死をこえて愛する従兄に似たところ」を見出すにいたるのも[30]、まったく心理的あるいは精神生理学的な範疇に属す現象であって、カロー夫人の次の手紙を思い出させる。ズュルマ・カローは生後十八ヵ月の次男について、「時折、あなたそっくりの表情を見せます。おなかにいるときに、あなたがわたしをじっとご覧になったせいだと思いますわ」と、バルザックに書き送っている[31]。

したがって、エチエンヌの海辺への追放を宣告した伯爵に向かって、「ご覧なさい。あなたの息子でしてよ！」[32]と叫ぶ伯爵夫人の言葉に嘘はない。だが、伯爵の迫害によって、エチエンヌは不義の子となるのである。それまでは伯爵の疑念においてだけ不義の子であった彼が、海辺への追放を境にして、伯爵夫人ジャンヌの心のなかでも不義の子、すなわちシャヴェルニーとのあいだの精神的な息子となるのである。

絶えず迫害されたために、伯爵夫人の母性愛はひとつの情熱となって、女たちが邪な感情のなかで身につけるあの激しさを帯びたのだった。[33]

ジャンヌはもはや、エチエンヌのうちに恋人の面影を見ることを恐れはしない。「じっと見つめる息子のまなざしのなかに、娘時代の思い出を初めて見出したとき、」彼女は「わが子を狂ったように接吻でおおう」[34]のである。「こうして伯爵夫人は、息子を母親に結びつける自然な感情を、よみがえった恋の情熱によっていっそう増さしめたのだった。」[35]「女たちが不義の子を愛するように」は、もはやアナロジーではなくなる。そして遂にエチエンヌは、彼女にとって、恋人の現し世における仮の姿となるのである。

女性は恋人に対して、なにくれと家庭的な世話をやくことによって、母親みたいな存在になることを好むものだが、それと同じように、この母親はわが子を模擬の恋人とした。彼女は息子のなかに、なんとなく死をこえて愛する従兄に似たところを見出していた。エチエンヌは、いわば魔法の鏡のなかにかいま見たジョルジュの亡霊みたいなものだった。[36]

ジャンヌは息子のうちに恋人の面影を求めるだけでなく、僧職につく運命にあったエチエンヌを宮廷人風に育てることによって、積極的に二人の類似を生み出そうとするが、この恋人的母親 la mère-amante の深い願望が完全に明らかにされるのは、臨終にいたってである。すなわち、ジャンヌは「かつて別れのきわ

に、シャヴェルニーがその生命のありったけを彼女に伝えたように、エチエンヌをじっと見つめて、彼女の魂のありったけを彼にあたえようと」する。[37] こうして、ジャンヌ・デルーヴィルの希求のなかで、ジョルジュ・ド・シャヴェルニーと彼女とエチエンヌとが一体化し、呪われた子は「まもなく再び結ばれる二つの魂の美しいイマージュ」[38]になりおおせるのである。

アンリ・エヴァンスによれば、バルザックには「彼を苦しめた正常な母性に対する嫌悪と、その代わりに弟を幸せにした罪ある母性を望む気持、そして彼自身が、母の心のなかで、幸福すぎる弟にとって代わりたい欲望」が存在していたのであって、『呪われた子』における母子愛の設定もそうした作者の潜在意識に応えている、[39] という。フランソワ・ジェルマンもこのフロイト的解釈を認めて、さらにバルザックには、母親の愛人であったマルゴンヌ氏になり代わりたい欲望すらあったと見ているが、[40] アンリ・ゴーチエはこれらの説を全面的に否定している。[41] ヴィレムサンス夫人の場合が代表的な例であるように、バルザックが不倫の母と不義の子のあいだで明らかに理想的な母子愛を描いていること、そしてエチエンヌもすでに見たように、その嫡出性にかかわらず、いや精神的であるだけにいっそう不義の子であることは、ゴーチエの見解に反して、認めざるを得ない重要な事実である。とはいえ、ゴーチエが指摘しているように、バルザックのうちに、それほど「母親への病的な執着の願望」があったとは想像し難いし、またバルザックが賛辞とともに描く母性愛と恋情との混合が、愛の単一化というきわめて意識的な、彼の思想に基づいていることも明らかであろう。

いずれにせよ、『呪われた子』の母性愛について、作者の潜在意識云々の問題よりもはるかに本質的に思

われるのは、エチエンヌの稀有な精神的能力がそれに由来していること、換言すれば、彼の心的状況、つまりは作者の心理的洞察がいかに見事にアニミスムに基づく汎神論と結びついているかを確認することであろう。

母の死によって、エチエンヌは極度の抑うつ状態に陥るが、やがて「愛の欲求、すなわちもう一人の母親、もう一つの自分の魂を持ちたい欲求を覚え、」[42]海と結ばれるにいたる。

彼は自分の思いを打ち明けることができるような、そして互いに生を共にし得るような、もう一人の自分を求めるあまりに、遂に大海原と共感するにいたった。彼にとって海は生命(いのち)あり、思考する存在になった。〔……〕彼は海の豊饒な生命に参与した。[43]〔……〕遂に彼は海と結ばれたのだった。海は彼の打ち明け話の聞き手となり、友となった。〔……〕この崇高な大いなる思考と結ばれて、彼の思考は孤独のなかで彼を慰め、魂の無数のほとばしりは彼の住む狭い砂漠に崇高な幻想を群がらせた。[44]

この海との共感と一体化は、ボードレールの『人間と海』(L'Homme et la Mer)の次のような前半の二節を思わせる。これらの詩句を書きながら、ボードレールの念頭には『呪われた子』の右のくだりがあったように思われる、とアントワーヌ・アダンが述べているが、[45]確かに蓋然性の高い推測に違いない。ただし、両者に共通しているのはナルシシスムであって、海に母性を求めるテーマについてはボードレールの詩篇は無縁である。

Homme libre, toujours tu chériras la mer!
La mer est ton miroir; tu contemples ton âme
Dans le déroulement infini de sa lame,
Et ton esprit n'est pas un gouffre moins amer.

Tu te plais à plonger au sein de ton image;
Tu l'embrasses des yeux et des bras, et ton cœur
Se distrait quelquefois de sa propre rumeur
Au bruit de cette plainte indomptable et sauvage.(46)

（阿部良雄訳(47)）

自由な人間よ、いつもきみは海をいとおしむだろう！
海はきみの鏡。きみは自分の魂を視つめる、
海の波の、無限に巻いては返すうねりの中に、
そしてきみの精神も、劣らず苦い淵だ。

きみは好んで自らの影像(にすがた)のうちにとびこんでゆく。
両の眼と、両の腕とでそれを抱き締め、きみの心は
時としてわれとわがざわめきから思いを逸(そ)らす、
抑えのきかぬ獰猛なこの嘆き声に耳かたむけつつ。

エチエンヌの思考は海と結ばれる一方、海を介して天上の世界に飛翔する。すなわち「彼は自然を調和のとれた総体のうちにかいま見た」のであって、海にもまして空は、彼の詩的想像力と秘伝学の力を存分に駆使し得る場となり、ときに彼は、あたかも絶対の探求者のように「神にいたるまで上昇」するのである。だが、所詮それは母の魂との出会いを求める彼の精神の旅にほかならないであろう。

彼にとって、星は夜の花々であり、太陽は父であり、鳥は友であった。彼はいたるところに母の魂を置いた。雲のなかにしばしば母の姿を見、彼女と語るのだった。実際、二人は天上のヴィジョンによって通じ合っていた。ときには母の声を聞き、その微笑に見とれる日々もあった。要するに、彼がまだ母親を失っていなかった頃の日々がそこには存在したのである！[48]

アンリ・ゴーチエは、「一八三一年から三六年にかけて、バルザックは『ルイ・ランベール』の精神生理学と『セラフィタ』のイリュミニスムを宇宙的人類学のうちに和解させた。『呪われた子』はそれらの影響

を蒙っており、そこでは心理が汎神論形而上学の支えとなり、今度は後者によって心理が説明され、仕上げられ、伝統的哲学が物質と精神のあいだに置いた二元論を解消する試みが提起されている[49]」と述べている。ゴーチエのこの見解は、右のようなエチエンヌの思考の軌跡を総括するものとして説得的であるが、一方、バルザック自身は次のような分析と意義付けを行なっている。

神は彼に古代の隠者たちの力をあたえ、事物の精神に参入する完成された内的な感覚を賦与したように思われた。もろもろの稀有な精神的能力のおかげで、彼は他の人々以上に、不朽の御業（みわざ）の秘奥深く突き進むことができた。哀惜の念と苦悩とがいわば絆となって、聖霊の世界に彼を結びつけていたのである。彼はその世界に、愛を身に帯びて、母を探し求めにいき、こうして、忘我の崇高な調べによってオルフェウスの象徴的な企てを実現したのだった[50]。

いうまでもなく、オルフェウスの企てはモーゼの奇蹟とともに万能の夢の象徴であって、呪われた詩人エチエンヌもまた、バルザックを早くから捉えてやまなかったこの夢、この願望に応えている。と同時に、エチエンヌの詩的想像力といい見者的才といい、要するにその「もろもろの稀有な精神的能力」の根源にあって、これらの力を最高度に発揮させ、彼に万能の夢を実現させているのは母への希求であって、あくなき知的欲求や熾烈な神秘主義的願望でないことも明らかである。そこに彼をルイ・ランベールやセラフィタ、あるいはバルタザル・クラースやフレンホーフェルといったバルザックの世界の絶対の探求者たちから区別す

る独自性があろう。端的にいえば、絶対がエチエンヌの探求の究極の対象ではなく、ひたすら母の魂を求めるがゆえに彼は詩人となり、自然の観照者となり、限りなく絶対に近付くのである。いや、エチエンヌの独自性については、もっと正確に、もっと普遍的に、次のようにいい直すべきだろう。およそバルザック的人間は現実によって満たされないものを希求し、あるいは現実をこえて愛そうとするときに詩人となり見者となるのであって、この呪われた詩人はそのきわめて純粋な典型であるがゆえに独自なのだと。

ところで、ランドルフ・ユーズによれば、エチエンヌをめぐる呪われた詩人のテーマが、ボードレールの『悪の華』(Les Fleurs du Mal) 冒頭を飾っている『祝福』(Bénédiction) に決定的な影響をあたえたという。すなわち、『呪われた子』とそれを補う形で『セラフィタ』が『祝福』のほぼ全面的な源であって、後者は主たるテーマと文章構造までも『呪われた子』から得ている、というのがユーズの結論的見解である。[51] それに対して、アントワーヌ・アダンは、両者に見られる親子関係については設定が違いすぎること、また詩人の宿命的な不幸と聖なる天職のテーマは、一八四〇年頃には、すでにロマン派文学の常套句的なものになっていたという理由から、『祝福』と『呪われた子』とのつながりには否定的であって、彼はもっぱら『セラフィタ』との類似に注目しているが、[52] アンリ・ゴーチエはなお、『祝福』の次の二節が『呪われた子』の特定のくだりと比較に値することを示唆している。[53] L'Enfant déshérité とはもちろん廃嫡の〈子〉の謂であって、これらのくだりはいかにもエチエンヌ的であろう。

Pourtant, sous la tutelle invisible d'un Ange,

L'Enfant déshérité s'enivre de soleil,
Et dans tout ce qu'il boit et dans tout ce qu'il mange
Retrouve l'ambroisie et le nectar vermeil.

Il joue avec le vent, cause avec le nuage,
Et s'enivre en chantant du chemin de la croix;
Et l'Esprit qui le suit dans son pèlerinage
Pleure de le voir gai comme un oiseau des bois.(54)

(阿部良雄訳(55))

ところが、ひとりの〈天使〉の目に見えぬ後見(うしろみ)のもと、
見棄てられた〈子供〉は、太陽に酔い、
その飲むものはことごとく、紅(くれない)いろの神酒(みき)となり、
その食うものはことごとく、香り高い神饌(みけ)となる。

風とたわむれ、雲とは言葉を交し、
歌口ずさみつつ、十字架の道に酔う。

その巡礼を見まもりつつゆく〈精霊〉も、
森の小鳥のように快活な姿を見ては、涙ぐむ。

エチエンヌは、一八三六年十月に発表された『砕かれた真珠』に再登場したときから、一八四五年（発売は翌年）のフュルヌ版で最終的に改められるまで、実はリュバンプレ侯 marquis de Rubempré であった。つまり『幻滅』(Illusions perdues) および『娼婦盛衰記』(Splendeurs et misères des courtisanes) の主人公リュシアンと同じ称号を付されていたのである。したがって、ボードレールがフュルヌ版で初めて『呪われた子』を読んだという、まずありそうもない前提に立たない限り[56]、彼もこのかなり特異な一致に気付いていたはずである。二人のリュバンプレの出現自体は、おそらく偶然の経緯によると推測される。とはいえ、バルザックが彼らのあいだになんらのつながりも意識していなかった、殊にそれを意識しないままにリュシアンの運命を展開させたとは考え難いのであって[57]、深い興味がその点にあることもいうまでもないが、ボードレールの目にはこの事実がどのように映っていたであろうか。いずれにせよ、エチエンヌ・ド・リュバンプレという呪われた詩人の母型的人物は、リュシアン・ド・リュバンプレという、きわめて近代的な挫折する詩人の典型との称号の一致によっても、ボードレールの注意を惹いたと思われるのである。リュシアン・ド・リュバンプレが、バルザックの作中人物のなかでも格別にボードレールの関心をそそる存在であったこと、これについては改めて縷説するまでもない。『娼婦盛衰記』の第三部に見出されるリュシアンの遺書中のくだりが、『悪の華』の題名決定に与ったことはほぼ確実視されるばかりでなく[58]、『幻滅』第一部で、アングレ

ームの社交界にデビューした彼を前に司教の述べる言葉が、ただちに『祝福』第十六節の詩句を想起させるものであることもおそらく周知であろう。[59]

『呪われた子』と『祝福』のつながりについて結論めいたことを述べれば、アダンの否定的理由が、明らかに牽強付会の気味があるユーズの所説に対しては有効だとしても、[60]テクスト間の類似に加えてボードレールとバルザックの世界の親近性を考えるとき、『祝福』のくだんの詩句を書きながら、ボードレールの念頭に、社会的世界では不幸を運命付けられ、天上の世界に至福の糧を見出すエチエンヌの精神の旅があった可能性、いや蓋然性は否定し得ないように思われる。ましてや、先に見たように、『呪われた子』の海との一体化については、『人間と海』の作者としてのボードレールの共感的な想起が推測されるのであれば、廃嫡の子エチエンヌの天上的な至福と『祝福』の詩人としての彼ボードレールのあいだにも、同種のつながりを肯定する方が自然なことだけは確かであろう。

話を母性愛に戻そう。エチエンヌにとって、「母は天国そのものであった」[61]ように、『追放者』(Les Proscrits)のゴッドフロワ少年も、天国の〈声〉が実は母の声にほかならなかったことを知るにいたるのである。[62]したがって、ジェルマンが形容しているように、彼らはまさに「双生児の兄弟」[63]的関係にあるが、あえて母性愛のテーマに限っていえば、『追放者』は『呪われた子』の下書きとみなし得よう。『呪われた子』では母子をめぐる心理的与件がいっそう豊かで確かなだけでなく、その母性愛には異性愛への継承と発展があるからである。

〔注〕

(1) バルザック『呪われた子』論序説——相続の観念から母性愛へ——(「成城文芸」第98号昭和57年2月)
(2) François Germain: Honoré de Balzac, L'Enfant maudit, édition critique établie avec introduction et relevée des variantes par F. Germain, 1965, Les Belles Lettres, p. 33.
(3) L'Enfant maudit, La Comédie humaine, nouvelle éd. de la Pléiade, 1979, Gallimard, t. X, p. 899. 以後、バルザックの作品その他でこの版によるものについては、巻数と頁だけを注記する。
(4) Ibid., p. 919.
(5) Henri Gauthier: Introduction à L'Enfant maudit, t. X, p. 860.
(6) L'Enfant maudit, t. X, p. 905.
(7) Ibid., p. 905.
(8) Ibid., p. 906.
(9) Ibid., p. 909.
(10) Ibid., p. 912.
(11) Ibid., p. 913.
(12) Ibid., p. 914.
(13) Ibid., pp. 914-915.
(14) Le Médecin de campagne, t. IX, p. 480.
(15) Avertissement du《Gars》, t. VIII, p. 1675.
(16) La Peau de chagrin, t. X, p. 282.
(17) Louis Lambert, t. XI, p. 616.
(18) Maurice Bardèche: Notice pour L'Enfant maudit, Œuvres complètes de Balzac, Club de

l'Honnête homme, 2eéd., t. 15, p. 279.

(19) F. Germain : op. cit., p. 59.

(20) 安士正夫『バルザック研究——「人間喜劇」の成立——』創元社、二一六頁。

(21) M. Bardèche : op. cit., p. 279.

(22) Henri Evans : Préface pour L'Enfant maudit, L'Œuvre de Balzac, Le Club francais du Livre, t. XI, p. 402.

(23) L'Enfant maudit, t. X, p. 892.

(24) Ibid., p. 902.

(25) Ibid., p. 902.

(26) La Grenadière, t. II, p. 430.

(27) L'Enfant maudit, t. X, p. 892.

(28) Ibid., p. 877.

(29) Ibid., p. 895.

(30) Ibid., p. 903.

(31) 一八三六年五月十四日付手紙。H. de Balzac : Correspondance, éd. de R. Pierrot, Classiques Garnier, t. III, p. 81.

(32) L'Enfant maudit, t. X, p. 898.

(33) Ibid., p. 899.

(34) Ibid., p. 902.

(35) Ibid., p. 902.

(36) Ibid., p. 903.

(37) Ibid., p. 910.

(38) Ibid., p. 911.

(39) H. Evans: op. cit., pp. 396—397. を参照。
(40) F. Germain: op. cit., pp. 71—74. を参照。
(41) H. Gauthier: op. cit., pp. 845—850. を参照。
(42) L'Enfant maudit, t. X, p. 912.
(43) Ibid., p. 913.
(44) Ibid., p. 914.
(45) Baudelaire: Les Fleurs du Mal, éd. de A. Adam, Classiques Garnier, 1961, Notes, pp. 290—291.
(46) Ibid., pp. 21—22.
(47) 『ボードレール全集I　悪の華』筑摩書房、三六—三七頁所載による。
(48) L'Enfant maudit, t. X, p. 914.
(49) H. Gauthier: op. cit., pp. 850—851.
(50) L'Enfant maudit, t. X, pp. 914—915.
(51) Randolph Hughes: Baudelaire et Balzac, Mercure de France, 1ernovembre 1934, pp. 476—518. この論文の第二章が、『祝福』とバルザックの両作品との関係に充てられている。
(52) Baudelaire: Lse Fleurs du Mal, éd. cit., Notes, p. 263 et p. 266. を特に参照。
(53) L'Enfant maudit, t. X, Notes et variantes, p. 1736. を参照。
(54) Baudelaire: Les Fleurs du Mal, éd. cit., p. 9.
(55) 前掲『ボードレール全集I　悪の華』一四—一五頁。
(56) ジュール・ルヴァロワの証言 (Jules Levallois: Mémoires d'un critique, 1896, p. 95.) によれば、ボードレールは一八四一年のモーリシャス島、ブルボン島への旅に、それまでに刊行されていたバルザックの全作品を携行して、読んだという。
(57) F. Germain: op. cit., p. 54 et note. を参照。ただし、バルザックがエチエンヌにリコメンドレ

侯の称号をあたえたのと、リュシアンの母親をリュバンプレ家の出身という設定にしたのと、いずれが先であったかは微妙な問題であると思われる。ジェルマンによれば前者が先であったのだが、ベラール女史はその可能性を認めながらも、結局、確かめようのないこととしている。Suzanne Bérard: La Genèse d'un roman de Balzac,《Illusions perdues》, 1961, A. Colin, t. II, p. 59 et note を参照。

(58) カルロス・エレーラ師ことヴォートランにあてたリュシアンの遺書中のくだりが、『ベアトリックス』(Béatrix) のなかの文章と相俟って、ボードレールの友人であった文芸批評家ベブーの発見ないしは着想という形で『悪の華』の題名決定に与った事情とその意味については、阿部氏が前掲『ボードレール全集I　悪の華』の解題（四二二―四二三頁）において、的確な整理を行なっているので、参照されたい。

(59) 『祝福』の第十六節は次の通りである。(Les Fleurs du Mal, éd. cit., p. 11.)

Je sais que vous gardez une place au Poète
Dans les rangs bienheureux des saintes Légions,
Et que vous l'invitez à l'éternelle fête
Des Trônes, des Vertus, des Dominations.

一方、バルザックの『幻滅』第一部では、アングレームの社交界にデビューしたリュシアンを前に、同地の司教が次のように述べるのである。(Illusions perdues, t. V, p. 207.)

《Qui dit poésie, dit souffrance. Combien de nuits silencieuses n'ont pas voulues les strophes que vous admirez! Saluez avec amour le poète pui mène presque toujours une vie malheureuse, et à qui Dieu réserve sans doute une place dans le ciel parmi ses prophètes.》

このくだりは、バルザックの詩論と詩人観――しかもまことにボードレール的な――を示すものとして、重要かつ周知の筈であるが、アントワーヌ・アダンが『祝福』の注 (Les Fleurs du Mal, ed. cit., p. 263.) で、右の文章のうちから Combien de nuits 以下 vous admirez! までを除いた部分

を紹介しながら、それを『セラフィタ』中のものとしているのは不可解である。不注意による間違いであろう。

(60) ユーズの論文について付言すれば、ポーに対する評価をめぐって看取される chauvinisme と、ボードレールの詩を借りものの寄せ集めにすぎないとみなすかのような基本的態度に、まず警戒せざるを得ない。とはいえ、『呪われた子』と『祝福』との関係自体は十分研究に値する、きわめて魅力的な課題であるに相違ない。

(61) L'Enfant maudit, t. X, p. 945.

(62) Les Proscrits, t. XI, p. 555.

(63) F. Germain : op. cit., p. 59.